トゥンリリミス寓話
「魔女と王さま」
(後編3)

エリー

2023/01/08

目次

本文 1

本文

01 目覚め

「あんな態度をとってたわたしをどうして叱らなかったの？」
　ニニーはゲウムに真剣に問いかけた。
「叱られたらやめられると思っていただろう？」
　ちょっと大げさにゲウムは笑って見せた。
　その通りだ。
　好きを押し通せば歌手になれると思っていた。でも違った。わたしは見習いとはいえ使命を帯びた魔女であり、権限と任務を持っていた。
　王が王をやめられないように、魔女は魔女を勝手にやめられない。生涯国のために尽くす義務がある。それが才能を持ったものの責務だから。魔女をやめるときは死ぬときだ。
　公務を引退しても、村や町で人に尽くす。
　グリーン教は、受け持った人が魂を育てきるまで神は新生できないと考える。だから自分を極めたら、周りを助けなければならない。
　最悪、新生が間に合わず、世界そのものである神の体が古びて、ともに消滅するからだ。
　自分が楽しみ、人を驚かせたいニニーにとって、部下の管理は重荷だった。正直、どうしてよいか分からない。
　だからなぜゲウムは問題が起きる課題を与えたのか問いにきたのだ。
　確かに注意されてたら、反抗して聞かなかっただろう。
　しかし完全に任されてたから、責任を自覚せざるを得なかった。
　すべての問題は自分が引き起こしたことであり、結果責任からは逃れられない。
　ウツギが鞭打たれることで罪を償い城に残ったように、ニニーも部下を導き育てることでしか鞭打たせる状況を作った罪を償えない。
　わたしの代わりはいない。
　そういう自覚がやっと芽生えた。

02 里帰り

魔女になる決意をしたニニーは、更なる権限を求めて出世するため、見習いから一人前の魔女になるための試験を受けることにした。
最初に母ピメレアに伝えよう。
月に１度の里帰りを楽しみに年末年始を過ごした。
そして魔女試験を受けられる通知を手にして、１月の終わり頃、故郷に向かった。
「お母さん、わたし、魔女試験受けることにしたよ」
気持ちを押さえきれず、扉をくぐりながら大声で呼び掛けた。
しかし返事は返らない。
居間にはニニーの好きなサンサリーンの甘い焼きがしが並んでいる。
いれたてカップの紅茶が湯気を立てている。
さっきまで母は確かにここにいた。
台所で洗い物でもしてるのかしら？
覗きにいくと床に母が倒れていた。
魔女見習いで医療の知識があるニニーは、すぐにかけより脈を探る。
反応なし。
間違いではないかと何度も何度も確かめた。
けれど結果は変わらない。
魔女見習いのニニーは、人が亡くなったらどうすればいいか知っていた。
人を呼ばなければならない。
でも少し、あと少し、そばにいさせて。
母の手を握り、ぼろぼろと涙をこぼし、嗚咽した。

03 葬儀

亡骸は焼かれ、骨は共同墓地に葬られる。
母ピメレアの埋葬の日は、朝から冷たい雨が降っていた。
埋葬は家族だけで静かに行う。
供養は夏にみんなで歌う。
骨がおさめられ、みんなが帰っても、ニニーは墓の前から動けなかった。
雨に打たれ、手足はすっかり冷えてしまった。
不意に風が弱まった。
振り向くと背後に人が立っている。
見知らぬ長髪の老人だった。
髪も肌も白く、エルメダーラ王国出身者であることがうかがい知れた。
老人は包みを差し出した。
「この日記帳には、この世の秘密にたどり着く方法が書かれている。その目で見てくるといい」

好奇心の強いニニーは、受けとるとすぐに包みを開けて日記帳を開いた。
この世の秘密を知ったら、みんなをびっくりさせられる。
一瞬、いつものニニーに戻り、わくわくした。
しかし次の瞬間、涙が溢れて読み進めることができなかった。
一番話したい母はもういない。

04 儀式

気持ちが落ち着き、日記帳を読んだ。
書いたのは祖父のマグノリアで、精神世界に行く方法が書かれていた。
満月の夜に、魔方陣の中心で、一定の呼吸を繰り返すと行けるらしい。
魔女試験に受かり、さまざまな課題を与えられるニニーの日常は忙しく、なかなか試す時間がない。
そんな時、王子バニラの結婚相手を選ぶ舞踏会の招待状が届いた。
10/31 の夜はちょうど満月。
お祝いで仕事が休みになるため、最大のチャンスだ。
ニニーは迷わず行動に移し、見事成功させた。

05 精神世界

気がつくとニニーは、晴れ渡る青空の広がる世界にいた。
現実と違うのは、足元が雲でできている。
そして人の背丈くらいの大きなダイヤモンドが輝いている。
そのそばに見慣れぬ風貌の魔女がいた。日記に出てきたリリーというガールナルミスの魔女だろうか？
見つめているとこちらを見た。
「ああ、あなたは.....もしかしてマグノリアの孫？　約束の子ども？」
なんの約束なのか気になるが、物怖じしないリリーは即座に答えた。
「わたしはニニー。マグノリアの孫。あなたはリリー？」
うなずくと近づき、包容された。
「まずはみてくるといい。この液体を飲んでダイアに触れて」
水筒からコップに液体を注ぎ、手渡された。
何が起きるか、日記で読んで知っていた。
迷いはなかった。
ぐいっと一気に飲み干し、ダイアに触れた。
意識がどんどん上昇していく。

　くるくると螺旋を描き、ぐんぐん上がっていく。
　そして不意に真っ暗になる。宇宙の果て、グリーンさまの体の外の虚無に突き当たったのだ。
　振り返ると闇に浮かぶ、巨大な緑のぞうりむしのような生き物が見えた。
　祝福の旋律の時に微かに感じた思念が強烈に流れ込んできた。
「思う通りにやりなさい。喜びも痛みも分かちあいましょう」
　不意に視線を虚無に向ける。
　すると虚無は距離をどんどん縮め、グリーンさまの輪郭をくっつけた。
　内と外が反転して、中心に点と存在するグリーンさまの周りに豊かな宇宙が広がった。
　世界は開かれ、広がっている。
　生きている。
　変化し続ける。
　圧倒的な歓喜の感情に思わず祭典の歌を口ずさんだ。
　するとグリーンさまが答えるかのようにリズムを刻んで脈打った。
　そして祝福の旋律が聞こえた。
「神よ。あなたのために尽くします」
　ニニーは心の底から誓願した。

06 ガールナルミスの貧困問題

「つまり、自由を権利として自力でできない人にまで認めたために、ガールナルミスは衰退したのですね？」
　リリーの話しを聞いたニニーは、さっくりまとめた。
「そう。本来、自由は自力で勝ち取るものであり、与えるのは間違いだった。しかし今さら奪うことは難しい」
　才能で仕事が決まるエルメダーラ王国なら、違う道を選べるかもしれない。
　その道を作るために選ばれた子どもがマグノリアの孫のニニー、つまりわたしなのだろう。
　どんなに困難な道でも、グリーンさまのためになるならばやりとげて見せよう。
　決意をリリーに告げるとニニーは精神世界を後にした。

07 辺境使い

「ウツギ、イイギリ、あなたたち二人を解雇します。そしてわたしは辺境に向かいます。びっくりした？」
　おどけたように笑って見せるニニーに、イイギリは手厳しかった。

「過去から学ばない人だなあ。一人でなにができるの？　僕は行くよ」
　初耳のウツギは怒っていた。
「首席のニニーが辺境使い。バカじゃないの？　俺は行かないぞ！　考え直せ」
　足早に部屋を出ていった。
「また追いかけないつもり？　行きなよ。きっと待ってるよ」
　そうだ。この先、多くの人の人生を預かって、改革していくのだ。ウツギ一人さえ説得できないでどうする。
　ニニーはウツギの部屋を尋ねた。
　部屋に入るとおずおずと語りだした。
「さっきはごめん。宮殿ではできないことをするために辺境に行くの」
　驚いた様子のウツギは黙って聞いている。
「辺境使いは、山奥の村の運営ができる。だからこどもの教育改革がしたいの。衣食住を平等に整え、好きなものはお手伝いして稼ぐ仕組みを作りたい」
　よくわからない様子のウツギはまだ黙っている。
「自分で気づいて動ける子どもは街に送り出し、金を稼いでもらう。教えないと動けない子どもは、村を守る一員に育てる。そういう実験がしたいの」
　困ったようにウツギが頭をかきだす。
「俺にはいいのか、わるいのか、わからねえ。ニニーに言われた通り動くだけだ。だが解雇って言われたからな」
　頭を下げるニニー。
「ウツギの体力が村作りには必要なの。わたしの部下になったことが、そもそも貧乏くじとあきらめてついてきて」
　ガハハとウツギが爆笑する。
「そこまでお願いされたら断れねえよ。行ってやるよ」
「うん！」
　ニニーはゲウムに部下をつれて辺境で実験したいと言いに行った。
　反対を覚悟していたがあったり了承された。
「破天荒なニニーには宮殿は窮屈だろう。小さな村の方が動きやすい」
　そして重々しい口調で告げた。
「実験が成功して村が繁栄すれば全国に広めることになる。その陣頭指揮をとるのはニニーだ。だが失敗して村を潰せば、死が待ってる。それでもやるのか？」
　迷いはない。即決した。
「やります！」
　ニニーの人生をかけた勝負が始まった。

08 山奥の村

　ほうきで空を飛び、ニニーひとりが先に村についた。

　想像以上に貧しかった。
　何もない。
　道もない。
「道を作るところからはじめようか」
　ニニーはひとりつぶやいた。

トゥンリリミス寓話「魔女と王さま」(後編3)

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社